



TITLE:

質疑應答

AUTHOR(S):

---

CITATION:

質疑應答. 地球 1931, 15(6): 481-482

ISSUE DATE:

1931-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183907>

RIGHT:

ホップを一ヘクターつくと八百二十六圓からの賣上があつて、支出金五八〇圓をさしひいても二百四十五圓の利益がある。利率からみると水稻で四〇%の利廻であるが、ホップは四二%である。

ホップの外に亜麻をつくと收入百七十七圓に達し、收益五十二圓利廻り四一%になる。

さうしたわけで滿洲農作物ではホップが第一位の利益農産品であるといふ、しかしホップはその植物學的性質上、栽培後兩三年は收穫がない、投下資本が回收出来ないのみでなく其栽培には相當多額の資金の外専門的特種の技能を要するので鮮人や華人には不向である、この點に於て北滿に於ける日本人農業者には好適の企業である、但し土地借入事實上困難があるから、今のところ華人と共營するか、又は華人の名義で借地することを要する。

## 質疑應答

問。世界の小麥產出の狀況を問ふ。

答。最近世界に於ける小麥の増加と同時に需要の減退とは相伴つて小麥價格の暴落を來たし、延ひて世界農業の恐慌の一因となつた、蓋し最近世界の小麥の産額は四三億乃至四七億ブツセルであつて、戦前に比して一割乃至二割の増産である、米國とロシアの八億ブツセルが最大で、加奈陀、アルゼ

ンチン、印度及濠洲がこれにつぐ小麥産地である、中にも南北アメリカと濠洲とで、常に世界産額の四割をしめるといふ勢である。今戦後五箇年平均及最近の主要各國小麥産額をしるせば左の如くである。

戦後五ヶ年平均

一九二八年

アメリカ	六四、五、〇〇〇ブツセル	八〇、六、〇〇〇
ロシア	四九、三、〇〇〇	八〇、〇、〇〇〇
フランス	二九、七、〇〇〇	三九、六、〇〇〇
カナダ	三六、四、〇〇〇	二九、八、〇〇〇
インド	三三、三、〇〇〇	三二、五、〇〇〇
アルゼンチン	三〇、三、〇〇〇	一六、一、〇〇〇
イタリ	一九、八、〇〇〇	二〇、六、〇〇〇
スペイン	一四、四、〇〇〇	一四、三、〇〇〇
オーストラリヤ	二六、五、〇〇〇	二六、〇、〇〇〇
ドイツ	九八、七、〇〇〇	一三、〇、〇〇〇
ルーマニヤ	八六、五、〇〇〇	九、七、〇〇〇
ユーゴスラヴィヤ	五、七、〇〇〇	四、九、〇〇〇

以上の各國はその重なるもので、我國の如きは三八、八七二、〇〇〇ブツセルを産し、印度の十分一内外しか出ない、さうして内地消費が多い。

世界小麥の收穫面積は略々三億千萬エーカーで戦前よりも約一割三分方擴張された、ロシアの作付は近頃特に大きくなつた、但し露、米、亞、濠等土地の廣い所は粗農だから其反

當り收穫量は少く、土地が狭くて人口の多いデンマーク、ベルギーの如き反當り收穫が多いから集約の農業といふものは重寶なものと考へられる、イギリス本國（アイルランドを除いて）の産が五九、八八六、〇〇〇ブツセル、之を我國に比して二千一百萬ブツセルの多くの收穫があるといふことは、注意すべき事實であらう。たゞし餘剰小麥生産國といふものが實は小麥の市價に影響するものであつて、カナダ、米國、アルゼンチン、濠洲の四大輸出國が世界總輸出額の約十億ブツセルを出す、さうして歐洲各國は年々約六億乃至九億ブツセルの小麥を輸入し消費してゐるのである。

處が一方世界人口増加率が減少し、工業國に於て一人當の小麥消費量が減少したので（不景氣のために）小麥の消費額は、その生産額のやうに著しく増進しない、そこでカナダやアメリカには小麥の持越が出来て滞貨の量は大きい、しかも其生産額は昨年度の如き大に増加した、そこで需要の均衡が破れたため暴落につぐに暴落、特に昨年八月以來露西亞のダンピング（投賣）の聲に驚かされ、大正十年最高三弗に比して

一ブツセル七十三仙に下落した、これでは米國の農業も立ち行かれぬといふことである。カナダ、アルゼンチン、濠洲、いづれも同様に不景氣で困りぬいてゐる。輸入國たる歐洲諸國でも其結果、自國の定價よりも安い小麥が輸入されるので國內市價が崩落し農民がこまる、こゝに於て小麥の世界的統制といふことが議せられることになつたが、折あしくもロシアは自國の森林を切り開いて、大農法を行ひ、産業五年計畫の下に器械を輸入して増産を實行した、所がその代金仕拂はその生産物で仕拂うといふのでことに米國へ器械代のために、シカゴ市場で大に小麥を投資したのである、その量八千萬ブツセルに上つた。この際ロシアの麥は相場から五仙を安くしたのである。さうした方法のために、米國農業は更に一つの脅威を感じたのである。其結果ロシアの投賣は國際問題と化し、ノルウェイやスウェーデン等隣國も亦之に對して協同の協定をなし、これを買はぬやうになつた。かうしたことも今日の世界の不景氣の一因である。生産制限をすゝめる人があるが、それは容易に行はれない、困つたことであると思ふ（F）